

日本英学史学会中国・四国支部

ニューズレター

No. 107

Historical Society of English Studies in Japan, Chugoku-Shikoku Chapter

私の英学事始：支部長就任のご挨拶

馬 本 勉

今年度の支部総会において、竹中龍範先生からバトンを受け継ぎ、支部長を務めることとなりました。長年にわたりご指導くださった竹中前支部長に心より感謝申し上げます。会員の皆様方には、これまで以上のご支援・ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。ともに会の発展に努めてまいりましょう。

私たちの支部が「広島支部」としてスタートしたのは 1977 年のことでした。この年私は中学生となり、英語を学び始めました。その頃からの教科書、辞書ほか英語の教材はすべて手許に残しています。中学・高校時代のものでは、ニューホライズン、クラウン英和、ラジオ基礎英語・続基礎英語・英会話のテキスト、ホーンビーの英英辞典、江川泰一郎の英文法教科書と問題集、森一郎の試験に出る英単語、赤尾の豆単・単総、山崎貞の『新々英文解釈研究』など。大学に入ってからのもものでは、*POD* 第 6 版、*Guide to Patterns and Usage in English*, *The Great Gatsby*, *Antony and Cleopatra*, 『日本の英語教育史』なども。これまでの「私の英語学習史」を語る材料には事欠かない、と思います。

支部の研究紀要『英学史論叢』の 46 年は、ちょうど私の英語学習歴と一致していることに気づきます。私を英語の世界に誘い、今日まで導いてくださった恩師の先生方も、通った学び舎の数々も、すべて広島の英学史と深いつながりがあります。広島の英学に関するテーマと出会うたび、自分とどのように関係しているかを考えるようになったのも、広島で生まれ育ち、そこで英語を学んできたことの影響かと思います。

支部との不思議なご縁はまだあります。私が入会したのは修士を終え教員となった平成元年。「年表稿」によると、「しばらく停滞していた支部の研究活動を再興するため、役員、事務局組織を改組し、活動を活発化することへの途が協議された」年です。3 年ぶりに研究例会が開かれたのは私の学んだ東雲キャンパス、新たに事務局が置かれたのはその年に赴任した比治山女子短期大学でした。そこから私の教師生活も早 35 年。今、教壇に立つ大学は、支部発足時に Anthony Farrington 氏（ロンドン英印図書館副館長）が「イギリスにおける日本研究」という記念講演を行った広島女子大学を前身としています。

先日、久しぶりに日本英学史学会全国大会へ出席し、総会で支部活動報告を行いました。ここ数年、週末の集中講義や大学行事と重なり、全国大会への出席は 2016 年の松山大会以来となります。今回は第 60 回の全国大会、来年は学会 60 周年とのことでした。そういえば、日本英学史学会の前身である日本英学史研究会が発足したのは、私が生まれた 1964 年でした。自身の還暦が近づいていることに愕然としますが、私自身はまだまだ「若手」と思っています。

先日、公開講座で「宮島の英学：宮島観光学入門（英語）事始」という話をしました。地域の英学史には、新たなテーマがまだまだいくつも横たわっています。会員の皆様との情報交換を第一歩に、令和の支部活性化に努めてまいりたいと思います。皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

（県立広島大学）

支部長を退くにあたって——ご挨拶

竹 中 龍 範

このたび、先の日本英学史学会中国・四国支部令和 5 年度総会（2023 年 5 月 27 日）における役員改選にて支部長退任をお認めいただきました。前回の役員改選の折にそろそろ若い人たちに引き継いでいただこうと役員会に退任の申し出をしていたのですが、コロナ禍中というタイミングで役員態勢が変わるのはいかなものかのご意見があつて、基本的に全役員留任ということが決まりましたので、さらにもう 1 期ということになったような次第です。この度は、この 2 年の間にオンラインの形にて総会、研究例会、さらには画面越しながら懇親会をも開催できるようになり、支部活動を支える基盤が整備されたおかげで、役員の交代が了承されたことによるものです。このような新態勢の構築が円滑に進められたのは役員の方々、別けても事務局の馬本勉先生、河村和也先生のご尽力によるところが大きく、記して感謝申し上げます。安心して次期役員の方々に任を託すことができ、嬉しく思いおります。

思い起こせば、中国・四国支部が昭和 52（1977）年に広島支部として設立された際に、これに先立って開催された設立準備委員会に参加してみないかと松村幹男先生にお声がけいただいて以来、役員末席に名を連ねるの榮を忝くし、松村先生の事務局のお仕事をお手伝いしたり、紀要『英學史會報』・『英學史論叢』の編集をお受けしたりしながら、微力ながら支部の運営に関わってきました。その間には、初代支部長として長くお務め下された定宗一宏先生から始まって、妹尾啓司先生、寺田芳徳先生、松村幹男先生、小篠敏明先生と代が改まりましたが、ことこの役職については未だ我が任に非ずと距離をおいておりました。ところが、ある時の役員会にて寺田先生からご発言があつて、私に支部長の任を担えとのご意見、まさに青天の霹靂とも言ふべき突然のご提案にこれを固辞したところ、「顧問・相談役たる私の意見をそのように軽々に取り扱ってもらっては困る」と厳しい口調で念をおされたため、お受けせねばならぬかと腹を決めたようなことでした。爾来、いつこれを辞しようかと思いつつも、役員改選のたびにあと 1 期、もう 1 期と圧力をかけられ、気がつけば 4 期 8 年を数えておりました。これですでに定宗先生を例外とする 2 代目以降の支部長の先生がたの在任期間を超えましたので辞任を申し出て、田村道美先生に引き継いでいただけることとなりました。勤務校を同じくすることもあつて、支部運営については私もお手伝いしますので、半ば無理やりお願いいたしました、田村先生は篤実温厚に加えて何ごとにも真摯に取り組まれる方ですので、快くこれをお引き受けくだされ、2 期 4 年間にわたってお務め下さいました。ただ、この田村支部長体制下、ことの経緯は忘失いたしました、私が副支部長ということになって、これがため、田村先生が辞されたあとに、ふたたび支部長を拝命することとなり、さらに上掲のようなコロナ感染拡大の事情も加わって、3 期 6 年間の再登壇となった次第です。

役職としての支部長という立場を見ると、支部運営の実務部分は、事務局長と役員中の会計担当、編集担当とにその大部分を担っていただけますので、この度のコロナ感染拡大にいかに対応するかの協議を除いては、特に非常事態、緊急事態が現出したというようなことはなく、特に激職ということはないように、この 14 年間に感じ取りました。その点で、すでにお名前を挙げました馬本先生、河村先生に加え、長く会計担当をお引き受けいただきました鉄森令子先生に、衷心より篤く御礼を申し上げます。その在任に長短はあれ、顧問の先生方や他の役員の方々にも感謝の意を表したく、そして何より、この支部を力強く支えて下された会員の皆さまには深甚なる謝意を表します。

ただ、一点、この支部長在任中の職務として最も悩まされたのは、紀要『英學史論叢』の巻頭言、ならびに支部長・副支部長間で持ち回り担当となっていた『ニューズレター』の巻頭エッセイの執筆です。今これまでに書いたものを読み返してみると、漢文がらみの表題や内容がなんと多いことかと呆れ返るほかありません。もともとが漢文好きではあるものの、それを英学史に結び付けようとするわけですから、木に竹を接いだものとならざるを得ません。しかも、どこかにその言い逃れを潜めておこうと思っ

でも、なにしろ紙幅が限られていて、これも思うに任せてとはいきません。最初に書きなぐった原稿は、それを規定の字数内に縮めようとする、言い逃れは言うに及ばず、意中にあるものの何分の一かは失われてしまいます。こうして書きあがったものは、まさに、書は言を尽くさず、言は意を尽くさずとも言うべき代物で、あとはお読み下さる方に眼光紙背に徹する読みを期待するばかりとの淡い期待をいただきながら体裁だけを整えておりました。さらには、『英學史論叢』巻頭言と『ニューズレター』巻頭エッセイとにおいてはそれぞれの趣意をいかに表し分けるか、これにも悩まされました。一応、前者には「論叢」が研究紀要であることで論文を書くという営為に関わるものを、後者にはNLが彙報的なものであることで学会運営や時事的な内容に関わるものをと考えてはありましたが、これとても截然と書き分けられたものではありませんでした。いま支部長の席を離れるにあたって、この職責から解放されることに、正直、安堵感を覚えるとともに、矛盾することとはなりますが、寂寞の感なしとせずといったところです。これからは少し自由気ままに「英学史随想」や「英学史時評」のほうに何か書いて、たとえ数ページと言えども、紀要各号の増ページに資することができればと考えております。

1977年秋に日本英学史学会広島支部として呱呱の声をあげたわが中国・四国支部も、50年に迫る歴史を有する組織として、日本英学史学会の各支部の中でも確たる地歩を占めていると自負しております。一時期活動を休止せざるを得なかった時期がありつつも、機関誌『英學史會報』・『英學史論叢』を続刊し、支部研究例会も開催回数を重ねております。初代支部長定宗先生がよく「小さく産んで大きく育てればよい」と仰っておられましたが、どれほど大きく育ったかは問わず、今なお成長を続けている姿をお目にかけたいところです。人間で言えば壮年期にあたる時期に支部長を務めることができたことを嬉しく思うとともに、馬本新支部長の下に支部活動をいっそう盛り立てていただき、爛熟の時代をお迎えくださることを祈念し、また、その時代の長からんことを願い、以て退任の挨拶といたします。有難うございました。

(元香川大学教育学部)



令和5年度 支部総会・第1回(通算87回) 研究例会の報告

日 時： 2023年5月27日(土) 13:00 受付開始
 会 場： サテライトキャンパスひろしま(対面会場)
 広島市中区大手町1-5-3 広島県民文化センター5階
 (Zoomによるオンライン同時配信も実施)
 参加費： 会員、非会員とも無料

プログラム：

支部総会(13:20～13:50)
 開会行事(14:00～14:05) 支部長挨拶
 研究発表(14:05～15:15)
 聴衆参加型座談会(15:30～16:40)
 閉会行事(16:45～16:50) 副支部長挨拶
 懇親会(17:30～19:00) 広島酒呑童子(広島市中区大手町1-4-25)にて対面開催

◇支部総会 (13:20～13:50)

田邊祐司会員を議長に選出し、以下の議題について審議を行った。いずれも原案通り承認された。

1. 令和 4 年度活動報告

- ・支部総会、研究例会（通算 85 回・86 回）、『英學史論叢』第 45 号、ニューズレターNos.103-105、役員会の開催（5 月、12 月）について事務局より報告

2. 令和 4 年度会計報告・会計監査報告

収入の部		支出の部	
繰越金	536,779	通信費	19,850
年会費*	86,000	印刷費（紀要）	55,000
紀要掲載料	7,000	事務費	440
銀行利子	2	事務用品	1,478
収入合計	629,781	支出合計	76,768
		次年度繰越金	553,013

* 年会費 29 口

以上、ご報告申し上げます。

2023 年 5 月 25 日 事務局 馬本 勉 ㊞

各位

本学会の会計を、収入並びに支出に関して、それぞれ関係書類及び領収書等により監査いたしました。その結果、会計報告の通り、全て適正、正確に会計処理ができていることを確認いたしました。

以上報告いたします。

2023 年 5 月 26 日 会計監査 野村 勝美 ㊞

会計監査 平本 哲嗣 ㊞

3. 規程の制定について

- ・『英學史論叢』編集規程、投稿規程の制定について、紀要担当理事より提案され、承認された。
- ・新規規程は本ニューズレターに掲載の『英學史論叢』第 27 号原稿募集の項を参照。

4. 令和 5・6 年度役員選出

支部長	馬本 勉				
副支部長	松岡 博信				
顧問(相談役)	小篠 敏明	竹中 龍範	田村 道美		
顧問	五十嵐二郎	小泉 凡	田中 正道		
理事	安部 規子	河村 和也	中舛 俊宏	能登原祥之	山田 昌宏
事務局長	河村 和也				
幹事	熊谷 允岐	田中 美穂	堂鼻 康晴	藤本 文昭	
会計監査	野村 勝美	平本 哲嗣			

5. 令和 5 年度活動計画

- ・『英學史論叢』第 26 号（通巻 46 号）発行
- ・研究例会（5 月 27 日、12 月 9 日）
- ・ニューズレターNos.106-108 の発行
- ・役員会の開催

◇第1回(通算87回)研究例会 <発表者のまとめと参加者の感想>

研究発表(14:05~15:15)

「英学第2ブームにおける単語集の研究: イロハ配列の系統に焦点をあてて」

熊谷 允岐(茨城大学)

【発表を終えて】第87回研究例会では、大変お世話になりましたことを心より御礼申し上げます。本発表では、明治中期以降におけるイロハ順の単語集に焦点を当て、その成立過程や先行資料との影響関係、教材に施された学習の工夫などについて報告を行いました。節用集や絵引(画引)と呼ばれていた教材群が、徐々に単語集として編纂されるようになる様子は、語を引いて、単に挿絵と共に西洋の事物に触れるという過程から、よりその語彙が持つ意味との結びつきを理解しようとする過程への変化とも読み取れます。極言かもしれませんが、日本における英学が英語教育に移り変わる様子が単語集という側面においても現れていたような気がしてなりません。最後になりますが、ご参加の皆様方より有意義なご質問、ご意見をいただきましたこと、重ねて御礼申し上げます。

◆英学の時代における単語集の系統について詳細にわたって比較・分析されており、大いなる関心を覚えました。蘭学の初期、大槻玄沢は『蘭学階梯巻下』の「修学」において「ナルタケー語ツハモ言辞ノ数ヲ覚ヘ読書ノ間助語等ニ心ヲ著ケ其文章前後上下ノ語脉ヲ貫通シ語路ノ連属等ノ趣キヲ熟シ得ヘシ先ツ初メハ怠リ無ク単ヘナル言辞ヲ多ク記憶スヘシ<中略>一語二語ツハモ習フニ從ヒ聞ニ任セ別ニ一小冊子ヲ作リアベセ二十五字ニテ部類ヲ立テ置キ「ヘーメル」ト云フ語ヲ得レハh字ノ部ニ記シ天ト云訳字ヲ添ヘヨ右ノ如ク心ナカク書集ムヘシ即節用集ノ趣キニテ只前ニ蘭語ヲ出シ後ニ邦語ノ訳字ヲ記シ置クナリ斯クスレハ四五百言ヲ暗記スルコト暫時ノ間ニシテ其後ハ其書ヲ読ミ其文義ヲ解スルコトモナルモノナリ」と自ら単語集を作って学習することを説いていますが、やはり『蛮語箋』などが出されるようになると、これがさらに『英語箋』、『普語箋』などに展開していき、単語は、この種の単語集を求めて学び覚えるものというように変遷していったのでしょうか。それにしても、イロハ引きとは現代人にはとても使いこなせないように思われますが、惣郷正明氏がどこかに、昔はイロハ引きの方が五十音引きより使いやすいという人が多かったと書いておられたように記憶しております。ご研究のさらなる進展をお祈りいたします。<Dragon>

◆市井の人たちのための単語集のお話はとても興味深いものでした。収録されている単語の実例を示してくださったお陰で、明治中期の人々の興味・関心がどのあたりにあるのかを知ることが出来ました。「イノシシ」が当時必須の(?)語彙だったとは面白かったです。現在では日本各地の農家がイノシシの被害で苦しんでいます・・・。

奥行き深い研究分野ですが、先生のご研究が一層深化しいつかまたその成果をご発表いただきたいものです。<もみじまんじゅう>

◆1800年代後半の英単語集にふれ、単語の読み方がフリガナで書いてあり、注意を惹かれました。いくつかフリガナだけを取り出してみましょう:「バトル」「ワイルドボール」「ファウンダル」「リーフ」「オールドメン」「レフト」「ライト」「ラージ」「スモール」「ロック」...

当時はこれらの発音は、Jones 式発音記号(1918)は未だなかったわけで、「おーるどめん」「らーじ」「すもーる」のようだったと聞きます。現在では英語学習者は [ɔʊld mæ(:)n], [lɑ:(r)dʒ], [smɔ:l] のように読めるわけですが、1900年頃のある回想録の一部に「自分も嘗て倫敦で Stafford-road という町の名の accent が間違っていた為に何遍繰返し発音しても通ぜずそれがためにツイ傍ら

のホテルに帰れないので当惑したことがある。」という行があったのを思い出します。今日のご発表に出てきた1800年代後半の英単語集の読み方から類推すると、倫敦でのこの方の発音は「すたっほろど ろーど」のような発音だったと思われます。この問題は我が国にとって、その解決は大変なことだという気がします。次の語は現代の日本語で使われています:「ファスト」(ふぁすと)。ところがこの発音とその意味をネイティブの人たちはどう理解するでしょう。

最後に、ご発表は論理の展開がよく伝わり、興味深く傾聴いたしました。ありがとうございました。

<Qats>

◆かつて同僚と話していたときに、学問にとって最も大切なこと(そして、大学生に身につけて欲しい力)は何かという話題になり、それは「腑分け」の力ではないかと発言したことがあります。分けることは分かること、とよく言いますが、それを時系列に実践すると「系統樹」の世界に行き着くように思います。ちょうど三中信宏『系統樹思考の世界:すべてはツリーとともに』(講談社現代新書, 2006)を読んだ後に熊谷先生の発表をうかがったので、生物の進化や写本の系譜をたどるような、とても刺激的な内容にテンションが上がり、その場でもコメントと質問をさせていただきました。今風に言うと、とてもシンパシーを覚えるご発表で、今後さらなるご研究に大きな期待を抱きました。ありがとうございました。<Horse>

聴衆参加型座談会 (15:30~16:40)

「英語教育雑誌をめぐる」

コーディネータ 河村 和也・馬本 勉 (県立広島大学)

【概要】広島文理科大学英語英文学研究室編『英語教育』、語学教育研究所『語学教育』の復刻(いずれも江利川春雄氏監修、ゆまに書房)を契機として、これまでに本支部で発表された論考の紹介や、参加者の体験談などを交え、英語教育雑誌の歴史を振り返りました。戦時下に『英語教育』と『語学教育』が「合併」した号があることは、その実態はさておき、広島の英学史の一コマとして語り継がれるべきことでしょう。この話題のほか、英語教育雑誌の「和文英訳」読者投稿欄に話が及び、投稿を続けた方や、添削を担当された方のお話など、興味は尽きませんでした。さまざまなエピソードをご紹介くださった皆様に感謝申し上げます。

◆2度目となる聴衆参加型座談会でしたが、英語教育雑誌という英語教員にとっては身近なテーマであった割には、ご参加の方々からの発言が少なかったように思いました。このテーマでは雑誌記事の著者としての関わり方と読者としての関わり方があって、さらに、これとは別に英学史・英語教育史に立脚点をおく英語雑誌史の視点も挙げられるために、これを整理した形で本座談会を運営していただくとよかったのではないのでしょうか。

なお、「雑誌」という言い方についてのご不満がもたらされましたが、この問題については日本英学史学会の会長を務められた井田好治先生が「英語雑誌の歴史」(池田ほか『教材と教育機器』現代の英語教育9, 研究社, 1987)にて論じておられます。<Dragon>

◆雑誌における和文英訳の投稿で出されたお題(空気清浄機)を聞いた時、かなり意外な印象を受けました。高尚な文学などを英訳するべきとまでは思いませんが、非常に実学的というか、少し面白みの欠けるお題だな、という気もいたしました。田邊先生が添削をされていた時代に、いったいどのようなお題が出されていたかについて定かではありませんが、先生がおっしゃっていた「文脈に合った語彙を探し出す」過程で生じる楽しさや面白みのようなものは、より泥臭いというか、人間味のある

お題でのほうが生まれやすいのではないかと考えておりました。空気清浄機のような説明的な英文は、それこそ機械翻訳や AI でも比較的容易に生成できます。一方で、わたしたちの心の機微のようなものをどうやって英語で表現できるのか、そういったことを考えさせられるお題もまた面白いかなと言うのが個人的な感想です<ポレポレ>。

◆それぞれ独自の特性をもつ雑誌を強引に「合併」させた歴史は忘れてはならない。狂気の軍部の仕業は日本の歴史の恥。二度とあってはならない。

『英語教育』(広島文理科大学)の原本と『語学教育』(復刻版)を学会会場で手に取って見ることが出来て嬉しかった。<もみじまんじゅう>

◆「さまざまな… 英語教育雑誌が果たしてきた役割について、参加者の経験談を交えて議論したい。昨年度好評を博した「ラジオと英語」をめぐる座談会の第 2 弾として、」とのコーディネータからの提言。即座に大修館の『英語教育』掲載の「和文英訳演習室」を思い出しました。当学会の会員に、一時期その演習室を担当された方があり、お話を聴いているとまるでその演習室の中にトランスファーされたような感覚を覚えました。この広大なタイム・アンド・スペースの中で、今から 50 年前の「演習室で小生が使っていたペンネーム」を話したら、「その名前知っている」との一言、How AMAZED I was !

今回の討議のテーマ、ありがとうございました。<Qats>

例会全体についての感想

◆当初は久しぶりに対面参加にてと思っておりましたが、連休中にふくらはぎに肉離れを起こしてしまい、ほぼ回復はしているものの、なお心配があって、オンライン参加に切り換えました。懇親会にも参加できず、残念この上ないこととなってしまいました。お恕ください。<Dragon>

◆事務局の馬本、河村両先生のご尽力でとても内容の充実した例会になりました。

ところで、各地の一部の学会・研究集会が高齢者の「介護例会」化しているのを見聞するにつけ、若い会員の入会を勧誘する必要がある大いにある。学会そのものが若い会員を育てるという意識が肝要で権威主義に陥ってはならない。各地には英学史の「資源」がどっさりあり「英学史ツアー」の企画とか、若い研究者に講演依頼すれば仲間を引き連れて参加してもらえる可能性がある。また、イベント情報を新聞社に送り掲載してもらうことなども考えるべきである。<もみじまんじゅう>

◆完全オンラインの開催が、徐々に対面・ハイブリッドへと移行している状況をととてもうれしく思います。当然、オンラインで参加する余地を今後も残すべきだとは思いますが、対面での会場に特有の空気感を、やはりオンラインで味わうことは難しいのが少し残念です。<ポレポレ>

◆ハイフレックス型での開催、オンライン参加ができました。オンライン参加で不安な点は、こちらの音声が届いて伝わっているだろうかという点です。聞こえていますか、と問い合わせると、大丈夫とのこと。音声面の不安定が、上下で起きていないか、事務局でもご心配な点だったのだろうと思います。ご負担は大変だったと思いますが、快適に聞き取れてありがとうございました。<Qats>

◆3 年余りの「コロナ禍」のもと、例会の中止が 1 回、オンライン開催が 4 回。対面実施とオンライン同時配信のハイフレックスは今回で 2 回目となり、技術的なことはずいぶんクリアできたと思います。ただ、充実した発表や対話が実現しても、やはり何かは足りない、という思いが募ります。オンライン派を自認していた私が、です。次回はずいぶん、皆様と直接お会いしたいと思います。<Horse>

日本英学史学会 中国・四国支部

令和 5 年度 第 2 回 (通算 88 回) 研究例会のご案内

令和 5 年度第 2 回 (通算第 88 回) 支部研究例会は、広島県庄原市にて対面で開催します。皆様ふるってご参加くださいますよう、よろしくお願いいたします。研究例会のあとには、懇親忘年会を予定しております。こちらの方へも多数のご参加をお待ちしております。

日 時： 2023 年 12 月 9 日 (土) 13:00 受付開始
会 場： 庄原グランドホテル
広島県庄原市西本町 2 丁目 16-5 電話 0824-72-6789
<http://www.shobara-gh.com/>
参加費： 会員、非会員とも無料

開会行事 (14:00～14:05) 支部長挨拶

研究発表 (14:05～15:15)

「佐川春水の英訳 ―虚子の俳句―」

森 悟 (日本英学史学会・日本英語教育史学会会員)

【概要】俳人としても著名な佐川春水は高浜虚子に心酔しており、島根大学の文理学部で英作文を教える際にも虚子の俳句を教材として活用していった。

春水が残した英作文の講義ノートには虚子の英訳が合計 10 句収められているが、そのうち 4 句は『日本英語教育史研究』第 38 号で報告をしている。そこで今回は春水が詠んだ俳句にも触れながら、未発表の 6 句を紹介したいと考えている。

研究発表 (15:30～16:40)

「森 修一 (庄原出身) の独案内に見る明治期の英語学習法 :

林 十次郎 (広島県土族) の独習書との比較を試みて」

馬本 勉 (県立広島大学)

【概要】明治期に短期間存立した庄原英学校では、アメリカの小学生用読本 *New National Readers* が英語教科書として用いられた。当時、その教科書ガイドとも呼べる「独案内」が多数出版されたが、その一つが庄原出身の森 修一 (1861-1931) によるものであった。本発表では、同時期に出版された林十次郎 (広島県土族) による英語独習書との比較を通じ、森の独案内の特徴を浮き彫りにするとともに、明治期の英語学習法的一端を明らかにしていきたい。

閉会行事 (16:45～16:50) 副支部長挨拶

庄原英学校関係資料・史跡見学 (17:00～18:00)

庄原市田園文化センター (17:00～17:30)、庄原英学校址ほか (17:30～18:00)

忘年懇親会 (18:00~20:00) 庄原グランドホテルにて対面開催 (会費 6,500 円)

◆庄原グランドホテルへのアクセス

自家用車をご利用の場合、庄原インターチェンジから約 10 分
(アクセス) <http://www.shobara-gh.com/access/index.html>

高速バスをご利用の場合、広島駅・広島バスセンターから、約 2 時間 (運賃 2,020 円)
(時刻表) <https://bihoku.co.jp/about/highway-bus/>

※庄原駅から会場までは送迎を予定しています。

令和 5 年度第 2 回 (通算 88 回) 研究例会・懇親会の参加申込について

★12 月 9 日 (土) に庄原グランドホテルでの宿泊をご希望の方は、11 月 10 日 (金) までにご連絡をお願いします。事務局にて禁煙シングルルーム (翌朝の朝食付) を確保いたします。宿泊料金は 6,500 円です (懇親会会費との合計 13,000 円)。

※確実に部屋を押さえるため、早期のご連絡にご協力をお願いします。

★庄原グランドホテルでの宿泊予約がご不要の場合は、11 月 30 日 (木) までに、例会ならびに懇親会のお申し込みをお願いいたします。

連絡先アドレス: eigaku.chushi@gmail.com

ご不明の点は、事務局 (0824-74-1727 河村研究室直通) もしくは、馬本携帯 (090-1335-6933) までお問い合わせください。



『英學史論叢』第 27 号原稿募集

日本英学史学会中国・四国支部研究紀要『英學史論叢』第 27 号 (2024 年 5 月発行予定) の投稿論文を募集します。研究論考、研究ノート、英学史随想、英学史時評、書評等、会員の皆様の積極的なご投稿をお待ちしております。

原稿提出締切 2024 年 2 月 20 日

- ・投稿に際しては、今年度制定された「編集規程」「投稿規程」、ならびに「標準書式」に従ってください。
- ・標準書式にそったテンプレートファイルをご希望の方は、事務局までお知らせください。

『英學史論叢』編集規程

1. 日本英学史学会中国・四国支部（以下、本支部）編集委員会（以下、委員会）は、以下の規定に基づき『英學史論叢』を編集する。
2. 『英學史論叢』に掲載するものは研究論考・研究ノートおよびその他のものとし、いずれも未発表のものに限る。
3. 研究論考・研究ノートは、『英學史論叢』投稿規程に基づき、投稿された論文を査読に付し掲載の可否および区分の決定を受けるものとする。本支部研究例会、日本英学史学会本部例会および全国大会、ならびに他支部研究例会における口頭発表をまとめたものを原則とするが、これによらない投稿も受理することがある。
4. その他のものについては、英学史随想、英学史時評、新刊書評・紹介等とし、会員の投稿および委員会の執筆依頼によるものとする。なお、新刊書評・紹介は本支部会員の著書ならびに本支部の活動に関わる著作を取り上げるものとする。いずれも原則として B5 判 2 ページ以内とし、体裁は『英學史論叢』投稿規程および標準書式に準じたものであることが求められる。投稿によるもの、執筆依頼によるもののいずれの場合も査読の対象とはならない。

附則 本規程は令和 5 年 5 月 27 日にこれを定め、同年 4 月 1 日より施行する。

本規程の改正は、役員会の議決により、総会に報告するものとする。

『英學史論叢』投稿規程

【投稿】

1. 『英學史論叢』に研究論考・研究ノートとしての掲載を希望する会員は、本規程に基づき投稿することが求められる。
2. 投稿に際しては、別に定める標準書式に従い、参考文献・資料・図版等を含め原則として B5 判 10 ページ以内の完全原稿をパソコン等を用いて作成する。あらかじめ編集委員会事務局に届けることによりページ数の超過が認められる場合があるが、その際も上限は 20 ページとする。
3. 原稿は正本・副本各 1 通を作成するものとし、正本には執筆者名を明記し、副本では執筆者名、および論文末の執筆者所属を伏せる。
4. 投稿は編集委員会に宛てた電子メールへのファイル添付によるものとし、メールの本文中に執筆者名および連絡先メールアドレスを明記する。
5. 投稿の締め切りは毎年 2 月 20 日とし、これに遅れた場合には受理が拒否される。

【査読】

6. 投稿された論文は複数名の審査委員による査読を受け、掲載の可否、および、掲載可の場合は、研究論考または研究ノートの種別が決定され、査読意見を付して執筆者に通知される。

【掲載稿の提出】

7. 掲載が認められた場合には、審査委員による査読意見等を踏まえて掲載稿を作成し、指定の期限内に電子メールへの添付ファイルにて提出する。
8. 原稿は提出されたものをそのまま印刷するものとし、執筆者による校正は行わない。
9. 研究論考・研究ノートの掲載料は 1 編につき 3,000 円とする。ページ数を超過した場合は、1 ページにつき 1,000 円の追加掲載料を負担するものとする。学生会員については、規定ページ数以内の場合は掲載料を免除する。ただし、ページ数超過の場合は、超過分について 1 ページ当たり 1,000 円を負担する。

10. 研究論考・研究ノートとして掲載された場合には、当該の『英學史論叢』が会員宛て配付分とは別に 2 部提供される。また、抜き刷りを希望する場合には実費によりこれを作成することができる。

附則 本規程は令和 5 年 5 月 27 日にこれを定め、同年 4 月 1 日より施行する。

本規程の改正は、役員会の議決により、総会に報告するものとする。

『英學史論叢』標準書式

1. 用紙は B5 判白紙を用い、上部および下部に 25mm、左右に 20mm、それぞれ余白をとる。
2. 本文は、10.5 ポイント文字を使用し、1 行あたり 38 文字、1 ページ 38 行の書式によって作成する。フォントは、和文は明朝体、欧文は Century を用いる。和文中の読点は「、」（全角コンマ）とし、和文・欧文を問わず、英字・数字はすべて半角文字とする。
3. 本文第 1 ページに論文タイトル、執筆者名を記す。論文タイトルは 18～22 ポイント文字を使用し、中央に置く。執筆者名は本文と同じ大きさの文字を用いて、右に寄せて記す。第 1 ページには、タイトル、執筆者名に続いて、30 行を本文（見出しを含む）にあてる。なお、掲載稿の論文末に、右に寄せて、執筆者所属をカッコに入れて示すこととする。
5. 本文中の見出しについては前節との間を 1 行アキとし、番号を付してゴシック体とする。但し、見出し中に欧文が含まれる場合にはそのフォントを Arial とする。
6. 注は、尾注とし、本文中に右肩数字によって注のあることを明記する。
7. 参考文献は論文末に一括して示す。

◆標準書式に沿ったワードファイルを学会ウェブサイトの次のページからダウンロードいただけます。

<http://tom.edisc.jp/eigaku/info.htm>

ご希望の方には事務局から電子ファイルをお送りしますのでご連絡ください。



英学史情報フォルダ

◇本支部顧問の小泉凡先生におかれましては、小泉八雲の民俗学的業績を究明し、八雲を日・米における民俗学の先駆者として位置付けるとともに、出雲地方の振興並びに海外との文化交流に寄与した数々のご功績により、令和 4 年度アカデミア賞をご受賞なさいました。まことにめでとうございます。

詳細は一般社団法人全国日本学士会ウェブサイトをご覧ください。

http://academic-soc.jp/activity_cat/prize_member/

◇小泉凡 (2023). 「文化資源として活かす作家と作品：小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）をめぐって」（令和 4 年度アカデミア賞受賞記念講演）『Academia』190, 32-45.

◇小泉八雲記念館（編）(2023). 『小泉八雲の怪談づくし』八雲会.（小泉凡 解説・監修）

◇日本英学史学会第 60 回全国大会（対面とオンラインのハイフレックス）

2023 年 10 月 21 日（土）・21 日（日）開催

基調講演「美しき死の物語：源氏の崇高なる美（Death is the Mother of Beauty: Sublime Aesthetics in Genji）」Dennis Charles Washburn

研究発表 6 件（本支部会員による発表は次の通り）

・戦前の日比谷高校の英語教育に関する研究：英語教師に焦点を当てて（保坂芳男）

◇田邊祐司 (2023).『句動詞のトレーニング：「普段着の英語」を身につけよう！』大修館書店.

◇馬本 勉「明治期英語教科書独習書の文法と訳読法：林十次郎の独案内と直訳を例に」日本英語教育史学会第 294 回研究例会 (2023 年 9 月 16 日) 研究発表.



事務局からのお知らせ

◇年会費の納入について

2023 年度会費（一般 3,000 円，学生 2,000 円）をご納入くださり，まことにありがとうございます。
これからお手続きの方は，次の振込先まで，どうぞよろしくお願いいたします。
（振込手数料は各自でご負担ください。料金が改定されていますのでご注意ください。）

ゆうちょ銀行「振替払込用紙」を用いる場合
（口座番号） 0 1 3 6 0 - 9 - 4 3 8 7 7
（加入者名称） 日本英学史学会中国・四国支部

ゆうちょ銀行へ他の金融機関から振込む場合
（店 名） 一三九（イチサンキュウ）店（139）
（口座番号） 当座 0 0 4 3 8 7 7
（加入者名称） 日本英学史学会中国・四国支部

◇『英學史會報』・『英學史論叢』総目次・著者別索引【2023 年版】

竹中前支部長のご尽力により，『英學史會報』・『英學史論叢』総目次・著者別索引【2023 年版】（『英學史論叢』25 号までを掲載）が完成しました。支部ウェブサイトにて公開しています。ご活用ください。

- ・総目次 http://tom.edisc.jp/eigaku/all_index2.pdf
- ・著者別索引 http://tom.edisc.jp/eigaku/author_index2.pdf

◇訃報

能登原昭夫先生 令和 5 (2023) 年 6 月 22 日にご逝去なさいました。謹んでお悔やみ申し上げます。

日本英学史学会中国・四国支部ニューズレター No.107 2023 年 11 月 7 日発行

発 行 日本英学史学会中国・四国支部（代表 馬本 勉）

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 5562

県立広島大学 生物資源科学部 英語研究室内

電話: 0824-74-1727（河村研究室直通）

e-mail: eigaku.chushi@gmail.com

ホームページ <http://tom.edisc.jp/eigaku/>

郵便振替口座 01360-9-43877 日本英学史学会中国・四国支部